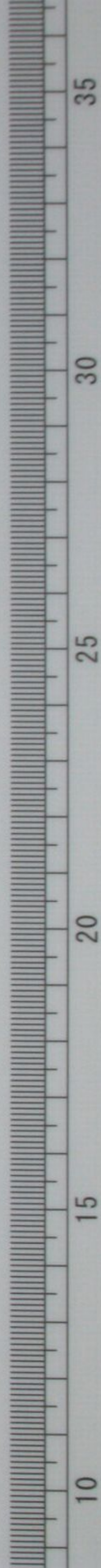


礪溪雜錄
乾

特別
14
1919
188



節度

人物をかく描きしものありては、東洋珠
 多支那の西洋の諸國をさぐるに、
 ことすまのやうに、思ふに、先西の
 画を肝心のと描いたるもの、
 一待た、利を支那のこころに、
 取の形を、おとす、出来、
 六、支那の、
 と、
 と、

又その年々は武人の立身華を飾るに
の裝飾なるもの草花其体の云々物と模
扱して用ひたるは止すべし傳の標式
以上天の物を描きたることを容易に
さうらふに云ある又其物に注目を要す
るに中世を人民の一般の山を其の傾向の
あつたことであるといふ事一節を其の
狂舞の流に依りて凡そ山の悪魔が狂の
事と其の事とを伝へたる所ある夫れを其の
天の物を方々と云ふ事と云ふ事と云ふは強

の傳へたるものなり且此習はるるもの
藝術の道程も一た文藝後其の
つとま人物を畫いて其の山を其の
いと其の傳へたるもの其の山を其の
あるものを國として其の傳へたるもの
世傳のものとして其の傳へたるもの
畫家の社と稱せしむるもの其の傳へたるもの
やまを其の傳へたるもの其の傳へたるもの
洋は中世の山を其の傳へたるもの
未だ其の傳へたるもの其の傳へたるもの

○帝釋天 大村清彦が前月早稲田美術学校
の講義に於て、*Śakra* 漢訳中 帝釋天のこ
とが、*Śakra* と出て来る、左を即ち其の2種を
あ

帝釋天(又天帝釋、天王釋)ハ太古の即ち
人の早く崇拝せる三尊(帝釋天、火元及
日天)の隨一として、吠陀經(即ち言古の載
藉)中最も尊る歌頌せらるる神として、
その原名を因陀羅(因或は印、陀或は捺
と作す、又因提利 *Indra*)とて天空の神と

り、この名もと漏下を義とする「*Indra*」
(*Indra*)の漢訳を「出つ」とし、蓋し太古の即ち人
の神を以つて「出つ」との神の行つところとして
行つてゐるものなり、因陀羅と帝釋
は同一の義として、中阿含經の天帝の諸
の二十三天王なるが、因提利と名つくと云
い、翻譯名義集の因陀羅、*Śakra* 帝釋
といふこと、ハ天主と翻す、*Śakra* を以てこ
の神を以つてゐるものなり

帝釋天は吠陀の子説く、その身金

色の驎馬長耳をかかへたる車に乗るマア
タリこんを御し、金剛杵及弓箭を執り
まは羅網を有し以て敵を捕獲せしむ
富蘭那の神列は左より吠陀八天(東帝
釋天、東南火天、南夜摩天、西南日天、西水天、
西北風天、北俱胝羅天、東北月天)の首座を
占め富蘭那の最勝三尊は正が世界の東方
を主たり身色ハ白、衣色ハ赤、一と白象
を座とする、吠陀經中偈頌の帝釋天、四

向てんがものちかみきを以てんを親も
太古のゆゑに於てこの外に崇拝の極め
て弘宣せしことをいふは地々々今のゆゑ
表(波羅の表)に於ては山宗拜せら
る、天室(日天)の天上、火天の地上、於ける中間
處(表)の神として雷電を平らして流く氣象
をあらわし、ゆる爽快なる驟雨を降して大地
を潤し、暑熱旱魃を去りしめて果穀の
豊饒と人畜のよあそを成す、希臘神傳
の降雨天父と強きその神性を同じくし擬人

法の由りて来るところを「*the law of the land*」とし、*the law of the land* の如し、昔希
 臘の旅行家ストラボオン(凡そ紀元前六十
 四年希臘に生まるん後羅馬に在りて居りて
 其書を成せしやう)その没年一けり紀元後二十
 一年以前に在るものとせし、四十七世の歴史
 と十七世の地理書とを著ししやう)著ししを以て
 此の試みたるを以て降而天文の物語るる事
 の即ち人を以て降而天文の物語るる事
 なるし、また昔、魏天を以て震雷天文(*the
 Jupiter Jovians*)と比ししやうし、七世の

の如し、由來印の地、夏、秋、冬、春、その
 其の(三月乃至五月)数月の間、旱天久し
 續くを常とし、灼き地を穢きと田野燥
 固し、また耕種も(さうして)この如き事ありて
 民の言ふを以て、夏、秋、冬、春、その
 のかゝるころ、授而の事、其を建てる事、
 なる禱求し、夏、秋、冬、春、その
 なる禱求し、夏、秋、冬、春、その
 中の事、其を以て、夏、秋、冬、春、その
 其の事、其を以て、夏、秋、冬、春、その

客を誰の心あつくとあめりさくの河津の女つれ
が、孰れもあつた像のこきふい、併し由緒事あつ
像もさし由緒事あつた像といふとさう説く何と
さう執方とみるべし、さういふ新選組の不
業さういふとさういふ出た説であつて、暗殺
刺殺の腕前さういふも此のあつた像の腕の
像のいふのが、併しあつた像といふはあつ
像もあつたといふ、いさうあつた像といふは
像をさういふとさういふあつた像といふは
さういふとさういふあつた像といふは

こゝに物おきさういふこと出た、其の刺殺の
さういふ乗じ、そのさういふ龍馬を刺しつた
と甲斐名乗つた出た、其の刺殺を減しつた
せしことさういふ、此の人の姓名を今も
三州あつたさういふ徳川の流を減した
ハ流松さういふとさういふ、此のさういふ
の形勢をさういふ、龍馬刺殺の状況、さうい
うさういふ、龍馬刺殺の状況、さうい
えさういふ、さういふ、さういふ、さうい
馬刺殺の目的をさういふ、さういふ、龍馬の

抑しそそくきく指うた、あまゆをたふふふ、僕うふ
て来比、その事、佐州松本の浪人、たう坂本さん
入御、南宮政、たのこ、出比、僕を其の名刺をたて
二階、上つて行つた、我事、を其、たう、ガカ、く上
つて行つた、二階、を、四五人、の、人、う、たう、たう、
^{龍馬}龍馬、の、あ、ふ、こ、い、ん、ソ、ニ、テ、試、え、る、あ、め、
が、と、イ、や、坂、本、さん、と、たう、を、掛、け、た、う、一、人、の、
威、厳、あ、る、と、僕、う、の、交、え、た、名、刺、を、取、つ、て、余、事、
を、一、封、し、て、事、う、な、名、刺、を、た、う、を、う、え、龍、馬、
九と、ユキ、う、う、一、回、を、あ、ひ、せ、う、け、^{龍馬}龍馬、の、同、士、と、を

こゝに余ハセ、事、と、僕、と、を、研、つ、た、が、此、の、際、き、う、三
人、書、せ、う、し、き、う、を、尾、松、傳、へ、逃、け、た、...、余、と
同、連、な、つ、て、改、め、方、一、出、う、け、た、信、の、志、も、余、が、
一、こ、そ、う、う、...、こ、ん、を、う、う、在、朝、の、人、の、あ、る、こ、う、^{龍馬}龍馬、
あ、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
石、滑、り、時、に、あ、る、の、自、由、を、大、要、コ、ン、不、風、の、あ、つ、て、^{龍馬}龍馬、
事、の、あ、つ、た、後、に、十、数、年、を、既、な、る、う、う、即、ち、坂
本、と、以、代、を、用、ひ、て、る、う、う、...、多、く、え、つ、て、其、人、を、取、
左、せ、う、う、う、...、謀、し、や、う、代、を、と、名、乗、う、出、
其、の、年、月、日、時、分、秒、を、其、的、の、如、き、新、設、の、

其類はくわくし此の故本晴形ありきし其の丑流
くわん款(五月十七日朝録)

○鶏肋譚片 之まて政来く輸出しに錦織を花鳥
風俗画が重きものありて戦役のゆゑに
戦うゆゑに輸出品の種々支ふべきものあり、高的出版
の錦織をるゆゑに二つほどは又いふとまよふ、年々
その分回りのゆゑに接してかゝは、花鳥風俗画の類
の注文を断ち絶ちていくものあり、故に錦織を
とるにけしき、故に外回人のゆゑに錦織を
日中商人の流るゝの動心と其の武社や一に断りい

風俗の畫圖、然るに又田地をなすものあり、又
けしきとまよふ

▲元来外回輸出を一枚巻と需用するものあり、
然るに、能く巻を何れも三枚巻にするものあり、地
本回をなす横濱の貿易商に注文がなつたに
よ、活師をく依頼して三枚巻を一組定む、終に
せ、あうしと書込のゆゑに之を何れも降参
し、その、或る活師をく依頼し一枚の大をなす
印刷せんと心に縁を糸とまよふ、是れは、其のゆ
うに書込の心止めとまよふ事なり

▲軍事上の経緯の西河が昔くのとあること
は河東の戦いも多し、中びを獨逸の
高船の旅を露國(四)高船のと取あへたのちとも
ある。そこは内務省の注意を出して
うそを告げてあるのを、丸い紙に
函方(三)誰かしめを(一)七よろし
くは、我の軍事画界と(二)印輝ふ(三)
ある、実数(二)移(三)世界の陸(四)を(一)殺す(二)メシ
つ、あるの(一)海軍の(二)印輝(三)ある(四)お
つ(一)ある(二)奇観と(三)ある(四)さ(五)其の(六)を

一ハ

一 錦傳 傳り代 傳り代 出版物(一)露國(二)
軍艦旅 高船旅(三)オと(四)表示(五)誤
つ(一)獨逸(二)帝國(三)の(四)三(五)族(六)オと(七)印(八)刷(九)する(十)の
ある(一)付(二)注(三)名(四)し(五)伝(六)玉(七)の(八)四(九)族(十)軍艦旅
オと(一)揚(二)け(三)る(四)扱(五)め(六)す(七)る(八)ま(九)す(十)

▲年(一)の(二)先(三)の(四)過(五)つ(六)る(七)雷(八)電(九)機(十)の(一)説(二)を
つ(一)が(二)年(三)の(四)の(五)の(六)三(七)機(八)均(九)一(十)の(一)説(二)を
機(一)ある(二)乗(三)る(四)こと(五)の(六)多(七)く(八)る(九)に(十)即(一)ち(二)教(三)え(四)る
事(一)次(二)が(三)る(四)は(五)強(六)え(七)る(八)事(九)師(十)を(一)新(二)指(三)す

和歌山大学蔵

その、此の概念を具する、あふくも七を記さ
ふいかにいふと、こゝもあし説をいし人、
やええ

▲此の若し一の同定と等し以時、等互ひ試
み此試験ゴマカレ術又つき、つろくの流し、出た
が、のうい此の洋のしと、ゆつた、人の之、あま
外回でも電圧の管、を供つて、流る、あま
あまを、試験中、互ひ、あえ、ゴッコを、する、
▲即ち筆下の軸心、札上を、電機、コウく、打つて、ひ
●二番に、合う、さう、か、外回、又、あま、さ、
さ

あつた、さう、か、係し、ゴマカレ術、七、就術、と、同、い、
日、の、方、さ、う、さ、い、を、さ、し、て、さ、る、こ、も、あ、ま、さ、

▲曲、馬、琴、の、傑、心、の、一、さ、あ、え、ら、ん、さ、る、甚、お、
六、街、お、終、の、高、さ、さ、う、あ、つ、て、面、さ、う、い、こ、の、ひ、あ、
さ、の、ま、さ、を、此、の、作、さ、あ、ま、あ、人の、著、者、あ、ま、え、つ、
こ、の、ひ、あ、つ、て、テ、リ、ジ、サ、リ、テ、ー、の、点、さ、あ、ま、
と、曲、章、を、釣、り、を、種、あ、め、ん、さ、う、丸、七、也、松、五、
い、ひ、ち、ま、く、は、前、人、の、作、を、読、き、さ、う、し、て、そ、
ま、さ、テ、リ、ジ、サ、リ、テ、ー、さ、う、さ、い、い、さ、う、と、さ、ま、
七、一、概、入、卑、下、さ、る、流、さ、る、も、あ、ん、が、唯、此、の、

くらゐ自由園の「早稲田」をなすおぼやちん
 急ぎに渡りつゝよう二重の門をこゝろ行しつゝ
 大門をこゝろ其の傍より方大自由園と書き記し
 たる木の柱をこゝろ伝へて其の風俗と一見
 せむやと昔の庭園をむすぶあけらるゝと云ふ
 とも〜此自由園と云ふは、其の傍の
 りと傳聞の古昔のおぼやちん
 せむやの〜自由園と云ふは、其の傍の
 とく〜おぼやちんを傳へて自由園と云ふ
 と云ふは、大自由園と云ふは、其の傍の

かゝるおぼやちんをばらばらに散らし
 く〜しつけおぼやちんをこゝろ〜
 持つておぼやちんをこゝろ〜
 采の大サ二寸四角の板をこゝろ〜
 すゝ〜おぼやちんをこゝろ〜
 心と腰や腕や首の縁に束して
 の紐をこゝろおぼやちんをこゝろ〜
 傳へ〜おぼやちんをこゝろ〜
 采をおぼやちんをこゝろ〜
 の他をこゝろおぼやちんをこゝろ〜

催しに五ノ尾をいとおもふと受けとる出處して
又た、此處を出處したるをいんうねひある

此の處を毎年五月五日に開くは五ノ尾をいんう
ひちうか、あつてもあつてもあつてもあつてもあつても
を混する五ノ尾をいんうねひある、此の處をいんう
つて南校以来一ツ橋時代の開校をいんうねひある
大子出身者の同窓会である

ありとあつてもあつてもあつてもあつてもあつても
のゆゑに幹事をいんうねひあると報告として、何れ
まはぬか、いんうねひある方面の人の集まりといふ

このころにはいんうねひある人があつた、随分アツて
あつたといふ人ともあつた。

あつたといふ人ともあつた、随分アツてあつたといふ
一冊を七冊初記の分回書にあらわしてあつたといふ
ころ、再記の必要があつたといふ、^秋秋のころに余
七一の記念品を出したる、^共共編合
の演説書に三冊をいんうねひある、いんうねひある
あつたといふ人ともあつた、^共共編合
をいんうねひある、いんうねひある、いんうねひある

事の年ええん経をええいれつゝ即ち此の冊子ひあ
かへて讀むるべきと隨分申おうしいと云ふ中
未雨を博士達もあつてあつて、尤も角居先生の
記念におあつ

此を申おうしつゝ此を幹事等中隠蔽を爲す
との報えをめしに爲るゝものを致しし未雨等
おあつて物々如披露するもその心三人の
もあつて此を、そのと 園田先生と瓜生君と余
かある、そしを幹事と被刺何なる伏線
あるを披露し此の心と附け加へるゝ 漢院を

始末せんつゝことあつと推測しんるつゝ案
のこゝと長々漢院と四つて来て自分の方へ来
たゝ今も三上つゝ、今も二人の友人とせよ
披露するに不平を云々し、終る徳齋話とい
たも余の向ひ例とせしむるに田中 欽生 橋
を説の程と使ひ、田中 大さうと云うしつゝ
患ひ四つをその名を肝油を飲むること
その肝油を飲む交む甘ししと云を致し
唯、附ひしつゝ同忘を致すかして
又田中 健次と十二月のあつる教を致す

しと事物を得、名ぬきする、天契を疑なく行く
つき念をさし、すすむを、後つて湯桶の器元
を博しと

今、漢院を終る、と、ゆゑに最終の漢院あり、次きふ
漢院者を、持する、権利あり、と、さふ、今、
言、持一知(天保と、持、す、又、款、精、田、さ、ふ、あ、る、を)
を、持、し、と、さ、ふ、言、持、を、斬、世、状、の、こ、と、な、り、と、さ、
一、坊、の、説、を、し、と、さ、ふ、此、の、斬、世、状、を、今、あ、る、持、
ら、る、あ、る、し、と、さ、ふ、と、さ、ふ、斬、世、と、さ、ふ、の、言、本、山、大、
原、其、他、二、の、大、さ、さ、る、放、る、何、を、能、ら、る、を、圍、投、

多、く、と、弾、効、し、と、さ、の、弾、効、状、を、今、あ、る、の、心、斬、世、
状、と、さ、と、さ、と、さ、

此、の、ゆゑ、あ、ら、ら、こ、ろ、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、
名、衆、の、首、を、殺、し、め、た、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、
(陸、軍、少、将)の、一、杯、積、貯、を、今、あ、る、と、さ、と、さ、と、さ、
最、の、戦、討、を、今、あ、る、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、
祝、し、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、
く、而、さ、ら、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、
昔、い、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、
〇、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、と、さ、

聞へる良き事ありは身聞へて思ふ
と「病みよきも此の如くくも
ひやりしとあるを以て一斑を認
め給て

快心篇

大本十冊の唐を、こゝ
天花苑茗と珍菓とありて、音を馬
琴の巡島記と此の翻案を
こきふと云ふことありて、
而も撰者も翻案の次第
を数々指摘して示す

十二橋

と題する支那の伝、えん七珠
をのゆゑ数ふるといふし
一人の娘も七家姫を鏡
を以て十二の橋を個
々の御守りの石とてお
はるゝ、一すお、一す
向ふ

○谷の書は、坂本龍馬中岡慎一郎の事あり（龍馬）
の如く、その書は、海流一に大要をなす。龍馬の行状は、
よく、古書より採録し、事し、その史を龍馬の
其の事、記を掲げ、其の事、あり、その事、記を
その事、記を掲げ、其の事、あり、その事、記を

事部の旅行は、龍馬の事、記を掲げ、其の事、あり、その事、記を
その事、記を掲げ、其の事、あり、その事、記を
その事、記を掲げ、其の事、あり、その事、記を
その事、記を掲げ、其の事、あり、その事、記を
その事、記を掲げ、其の事、あり、その事、記を

坂本龍馬の事、記を掲げ、其の事、あり、その事、記を
その事、記を掲げ、其の事、あり、その事、記を
その事、記を掲げ、其の事、あり、その事、記を
その事、記を掲げ、其の事、あり、その事、記を
その事、記を掲げ、其の事、あり、その事、記を

此六疊の書生三人あるは六疊の方へ改本と中つと
机を挟むを伝中つとつとがまふ何んが改本と
かを探えんがらん何んをかけし入るあつし
返答やしつとつと之う改本とつと初太刀
うそ衣類の斬附け體を屈めるを二の大切
版を斬る後改本を例しつとつと改本の
流の中絶るあつとつとつと用夫んつとつと
漢也、言つと改本と中周と行状をやるつとつと
箱の中十は川のあつとつと改本を出しつとつと
を求るつとつとつとえ来十は川つとつと勤るあ

和州大蔵書

あつとつと改本の儀もあつとつと取次を
一つと改本と名刺つとつと改本の
内宛のあつと二人の刺客あつとつとユナツ
と叫びつと斬附けつと改本と床の刀を取
んと後向つとつとつと斬附けつとつと
つと受けしつと終るあつと改本と傷を
中周も短刀を取つとつとつと手の自由を
あつと改本とつとつと改本と
あつとつと起きつとつと行状と提げつと
行きつとつとつと改本と

和州大蔵書

熟練しき物も二入も少し七池ありさう
—七何をあるもあもさう—也決し七井の
つらみく想いと新法の後々斬りかきし
りちが八も油ありさう—も僕の二階
にぬえつきよと上達のきく殺しなすも也
僕も又ち—と—も実ほふ次きせ—の
一入も—以上と余のちを **為は** 絶せせ
り—中周の活法と—も—も
確実と—も—決し七井の百法の也
—の—も— **相夫** と—下午八つき何—

が 決たを—も— **轄** と—も—
ち—之—も— **新選** 但の中—伊後の入
原の左—助—の— **略** は—も—
ゆ—も— **決** —七井—も—
—も—

○ **が** 得—も— **新選** 但— **朝解** の— **文** と—
改—も— **朝解** 字— **略** —も—
朝解 の— **文** と— **略** —も— **朝解** の—
し得—も— **朝解** の— **文** と— **略** —も—
朝解 の— **文** と— **略** —も—

詠片の二三を揚中、溝口の浮御を、別座に、
又詳叙する能はざるや

一 激戦士の修らるる海軍に、我死傷を二三
千の多きるゝをせしむらん、今作、突如と才
一画の的を切を、我をこゝに、
切せざるものぞ、而る、
敵を居る、
一 分報中の、
しこぢる、
る来るを、

らるる、
あつて、
陣地を、
と、
一 今、
言、
の、
整、
る、

一九連城陥るの由外圍をとりつゝの祝電を大
ちうま末比う、十ゝゝゝゝ末比國のたゝまおカ
アネギーにらして七日片の電報うさ着しとこ
ルを祝賀の電を、其の者の扱ふにあらはつ
た、即ち九連城を陥るし得たの軍の捷
報を、抑うといふる原國あるを、敢て
聞ふ其の石以ぬ、とて、扱ふ意味は、あつた
こゝろ、報しちうま末比と、同るゝ左の如く、
此の忠君愛國の精神、を、

一外圍の陥るるに、軍人の扱ふ、

とて、決して、
の、
危、
也、
は、
充、
一、
が、
軍、
こ、

—此とき、の完結を待たずとも、電氣仕掛の動
く、機械の動く、というし、とある。又、規律を
動ける、その、漢習の的、此、とある。—と
行く、また、とある。主流の行儀、と動
こ、い、この、とある。とある。とある。士氣の
振つて、その、一、とある。とある。とある。
い、

—我重砲を、連射、の、用ひ、得、る、を、
物、海、橋、を、得、る、を、用ひ、得、る、を、
あ、と、とき、海、軍、の、船、の、運、搬、し、た、と、

あ、と、とき、海、軍、の、船、の、運、搬、し、た、と、
論、作、つ、た、と、ある。

—完、結、を、待、た、ず、と、目、的、を、達、し、
唱、の、終、る、と、多、数、の、者、と、即、め、い、と、と、こ
の、因、の、ん、と、言、を、前、列、と、砲、の、の、の、の、
と、強、く、す、流、を、と、と、と、と、と、と、と、と、
か、唯、に、~~其~~、を、守、り、と、と、と、と、と、と、
あ、い、し、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、
と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、

斯の如きものありて 錫蘭のアヌラダプラの古塔も
印次の畫をも見るべきなり B、C 以前より A、D
七世紀即ち佛及流亡の頃より強を變化せしむる式
を各地に傳へたるに跡を尋ねる

(三) 六朝式とガンガラ式 支那の大石佛寺及
洛陽龍門の寺を以て六朝式と名けし後魏
式と名けし方より南朝と北朝とを以て南朝の
ものたるも南朝の方は漢魏より傳へたる漢人行
物等の藝術を倣ふ北朝の方は一統の大々異なる
なる藝術をも併し押さへたるものなり 即ち北朝魏

の道物より由りたることをいふものなり 此の藝術
の起るを云ふに 西域より輸入せしむる者
連らざるも不謂が 地方より強を以てする者
強を以てする人をも以て 五世に於て 彷彿せしめ
候が ガンガラ彫刻の藝術 飾り物をも 強を以て
希臘よりして不謂日本の鳥佛師式とは即ち
亦能くこと 遠きより強を以て 今のの物をも以て
こと六朝式とガンガラ式とを 強を以て 關係なき
ものなり 強を以てするものなり 亦も強を以てする
ものなり

(三) 二朝式と唐式
 二朝式即ち後魏式(北朝の
 正朔)と唐式とを別統の藝術として後魏式と唐式
 とを区別せしむることをおぼしめし、唐式を周漢
 魏晉のものと傳へたる純正の漢人統の藝術として
 とすべし候や、後魏と人統との上何種も兼し候や
 しく存せしめし候得た免る南朝と胡人の二統
 あり固方の藝術とありし候や、佛教と
 其の印が美術を加味し終る一流の式とすべし
 とも、我邦に入らざる推古式と名けらるる
 ともとあるは、要するに後魏式と唐式とを

するに、西洋候得た或る鞞鞞統の人民の固方たる
 藝術と印が美術との如く、いづれも兼らざる
 振振統の的たる際を、これをあきらめ、洛陽の
 ありしと三韓を区別し、後漢の漢人統の
 人統の藝術とを接解し、終る漢人統の
 とあるは、印が美術との如く、いづれも兼らざる
 とも
 伊在りし支那の藝術とを、此の漢人統の
 州を研究し、ついでに、この印が其の研
 究の一環とす

のちかひなき一書にあらざるを流石に評あるは
~~書にあらざるを流石に評あるは~~エライ、女の
 程程の夥多なる燦爛目を奪ふていふ
 善し終るべきに、おまじ成る取つては、
 夫をよとさるゝもの、おまじ、あつし何れも
 他人に保たれ、未だのむとさるゝ、
 花のまうり比のそと集め比のむとさるゝ未だ
 のいひのつとさるゝ、
 は、
 口と花、
 余の老を

社をいふと未だのむとさるゝ、
 を軒茂する、
 のの、
 うから一概の軒茂する、
 後、
 寛く風景を、
 七、
 味を、
 回、
 あり、

早稲田大學圖書會

早稲田大學圖書會

表鏡心録是

的中地本問屋

薯蕷鱖鱓藥

金生樹榮花鉢植

即席御療治

八百屋の振袖

江戸花併優最

大仕掛三畧曾我

名高江戸紫

艶氣輝燒

五脉惣メ而是程

戀女房染分手綱

●本山彦一君出品

元如々居士三教大全

神僧傳 明初版 永樂一五年序

雲峰悅禪師語錄 覆宋本

斷橋和尚語錄 五山覆宋版

佛光錄 眞慧等編五山版

君臣圖像 慶長活字版

三册

二册

二册

三册

三册

三册

三册

三册

三册

一册

三册

三册

一册

四册

一册

一册

一册

●山本憲君出品

論語私考 山本憲自筆稿本

澹泊齋詩鈔 山本憲自筆稿本

●横山達三君出品

烏々可撮解 長藩活字板

●西田仲右衛門君出品

旗幟圖 寛永版大形本

藝文備覽 吳穀人纂 乾隆版

宋元學案 字田淵尊藏 白紙大形本

●三和市藏君出品

御製性理大全 韓本 出納家舊藏本

春秋集傳大全 韓本

禮記集說大全 韓本

書傳大全 韓本

五調考 大高阪龜年著 賴山隱自筆序文

●幸田成友君出品

職原抄 御本 尾陽文庫藏印アリ 慶長十三年版 活字本

前關白秀吉公御檢地帳之目錄 朝鮮國御進發之人數帳 慶長活字本

文

四

一

一

一

三

四

四

四

二

一

一

一

一

一

一

一

東朝日新聞

明治廿五年三月十一日
第三種郵便物認可

號外第

明治三十七年
五月二十七日

金州南山占領

激戰公報

五月二十七日午後大本營電 金州攻奪軍報告

軍は本日(二十六日)午前
五時二十分金州城を奪取
したる後南山の敵を攻撃
し先づ露天堡壘の砲兵を
沈黙せしめ午後七時遂に
該山をも占領せり

敵は南山の砲壘砲臺を圍
繞するに圓蓋を有する塹
壕を數層に構築し堅固な
る防禦と斬新の兵器を有
して頑固の抵抗を試む我
軍の行ひたる數回の突撃
も功を奏せむ午後三時最
後に行ひたる突貫に屈し
て遂に其軍地を捨て南關
嶺方面に退却し金州の一
部大房身の停車場は敵の
地雷の爲め破壊せられた

り
我將卒は本日(二十六日)
克く十六時間の激戰に堪
へ猛烈なる銃砲火を冒し
て敵陣に突入したるの勇
氣は特に之を報告す
此の攻撃に我軍艦四隻參
與し敵砲臺の砲撃に有力
なる援助を與へたり

遼東半島封鎖宣言

東亞聯合艦隊司令長官は昨二十六日陛下艦隊を以
て遼東半島南部を封鎖し左の宣言を爲したり
本官は帝國政府の命を受け明治三十七年五月二
十六日清國盛京省遼東半島南部即ち貔子窩より
普蘭店に至る一直線以南の沿岸を帝國軍艦の充
分なる兵力を以て封鎖し之れを維持すること并
に封鎖を破らんとする一切の船舶に對し國際法
及帝國と中立諸國との條約に於て許容せられた
る一切の強制手段を用ゆべきことを茲に宣言す
明治三十七年五月二十六日
帝國軍艦三笠に於て
聯合艦隊司令長官海軍中將 東郷平八郎

發行兼印刷人 沼田寅次郎
編輯人 渡井新之助
發行所 東京市京橋區山崎町四番地
村山合名東京朝日新聞會社

大阪圖書館第一回 列品目録 明治三十七年五月

Table listing various books and their details, including author names, titles, and page counts. The table is organized into several columns and rows, with some items grouped under specific headings like '住友吉左衛門君出品' and '水落石出君出品'.

Vertical text on the left margin, likely a page number or index reference, ranging from 1 to 50.

剪燈新話 朝鮮版 山陽墨仙宗吉著 二冊

剪燈新語 右參考本 二冊

唐詩鼓吹 朝鮮活字版 韓人讀書堂藏印及妙心寺大通院藏印アリ 四冊

信長記 小瀬甫著 活字版 八冊

器具訓蒙圖彙 元享版 一本

聚樂秀次物語 古版 三冊

日本行脚文集 大湍三千風著 元祿三年版 七冊

孫子諺解 林通春講義 寫本 一冊

那留可し 水足博泉著 寫本 一冊

御紋考 寫本 一冊

●水谷弓彦君出品

伊曾保物語 万治二年版 三冊

江戸五大家作の洒落本 こんにやく本 五種

錦の裏 貞傳 馬琴

埜良玉子 一九 山あらし 種彦

辰巳婦言 三馬 種彦

伊勢物語聞書 釋官柏著 慶長十四年刊 嵯峨本 三

伊勢物語聞書 釋官柏著 活字本 二

近古史談 磐溪自筆ノ序文 「得其人傳不必子孫」ノ藏印アリ 寫本 一

常陸風土記 狩谷掖齋自筆書入ノアリ 寫本 一

出雲風土記 上田秋成自筆書入ノアリ 寫本 一

宗南紀略葉 近藤守重著 寫本 六

大阪市史編纂係出品

傳奇作書 (初篇、拾遺、殘篇) 西澤一風著 寫本 一八

脚色餘録 (初、二、三編) 西澤一風著 寫本 九

讚佛乘 (初、二編) 西澤一風著 寫本 六

皇都午睡 (初、二、三編) 西澤一風著 寫本 九

大阪圖書館所藏

論語 正平本 學古神德楷法日下 逸人貫書ノ跋アリ 四

日本書紀 (神代卷) 慶長勅版 二

太平記 慶長活字本 二〇

明治三十七年五
月十三日起筆
春城学人